

## 戦前日本の教育学における「本能」概念の展開

### —『教育学术界』記事を中心に—

柘植宗樹

#### はじめに

本稿の目的は、『教育学术界』<sup>1</sup>記事の分析を通して、戦前日本の教育学における「本能」概念の展開を明らかにすることである。

日本において教育学が成立した19世紀後半は、生物学が大きな力を持っていた。中でもダーウィンの進化論を起点とする知的革命は、日本の教育学形成にも大きな影響を与えたといえる。教育学が人間を理解する際には、先天的要因と後天的要因に分けて論じるが、進化論は先天的要因を表すものとして二つの概念を科学に与えた。一つが「遺伝」であり、もう一つが「本能」である<sup>2</sup>。両概念はどちらも先天的要因を表すにもかかわらず、それぞれ異なる意味を与えられており、異なる教育言説を生み出していた。しかし、戦前の「能力」概念に焦点を当てた研究では、「遺伝」概念と「遺伝」に対応する「環境」概念のみに焦点が当てられてきた。以下ではそれらの先行研究を二つに分けて、その課題を指摘しておきたい。

一つは、優生学<sup>3</sup>に着目する研究である。高木雅史は進化論から派生した優生学の隆盛を背景に、大正期の教育学において「遺伝」に対しての注目が非常に高まり、「遺伝」決定論に基づく能力観が形成されたことを明らかにした<sup>4</sup>。桑原真木子も同様に、「遺伝—環境」という対立軸のもとで、教育学が優生学と結びついていたことを指摘した<sup>5</sup>。上記の研究には二つの課題が存在している。第一に、戦前の教育学において優生論、すなわち「遺伝」決定論に基づく能力観に還元されない教育言説がなかったかのように論述していることである。第二に、「遺伝」概念とはそもそも何だったのかということに対しての分析がおこなわれていないため、現代の「遺伝」観が分析に反映されてしまっていることである。これらの課題は「本能」をみていくことで解消される。後述するように、「本能」概念は優生論に還元されない教育言説の存在を可能にしていた。また、「遺伝」は「本能」との関係の中で意味を獲得していたため、「本能」概念を分析することで「遺伝」概念の意味するところも明らかになってくると考えられる。

もう一つは、森田尚人の一連の研究である。森田は、明治初期の教育学者である伊澤修二や明治後期の教育学者である吉田熊次に関する研究を通して、日本の教育学は、「ダーウィン進化論の『思想圏』のなかで形成された」<sup>6</sup>のではないかと、という仮説を示している。「思想圏」という概念は「いかなる思想的営為も、受容するにせよ拒絶するにせよ、その影響から免れないようなグラント・セオリーが存在していた」<sup>7</sup>思想的状況を指すものである。つまり、成立期の教育学は、進化論から人間を理解するための方法論や概念モデルを受容していたといえる。森田の研究は、日本の教育学が進化論といかなる関係を持っていたかといった次元ではなく、そもそも教育学の成立基盤が進化論であったと述べている点で示唆に富んでいるが、一つの課題が残る。それは、進化論が作り出した概念のうち、「遺伝—環境」図式のほうだけに注目していることである。しかし、教育学の成立基盤が進化論であったというならば、進化論から生まれた「本能」概念もまた考察する必要があるだろう。後述するように、「本能」を、教育学を根底で支える概念と認識していた論者も存在していたのである。

以上の先行研究の課題を踏まえて、本稿の課題を以下の通り設定する。第一に、『教育学術界』の記事のタイトルに使用されている「能力」諸概念を数え上げることによって、当時の教育学が生物学に基づく概念を多く使用していたことを示すと共に、「本能」概念が考察に値するほど注目を集めていたことを示す。第二に、「本能」をタイトルに持つ『教育学術界』の記事の内容を分析し、「本能」概念の特徴、「本能」概念と教育との関係がいかんか理解されていたかを検討し、同概念が優生論や「遺伝—環境」図式に還元されない教育言説の存在を可能にしていたことを明らかにする。第三に、当時刊行されていた教育辞典と教育学術書を使用し、第二章で分析した「本能」概念が教育学用語として受容され、「遺伝」とは異なる概念として定着した可能性を示す。以上の課題から、戦前教育学の人間理解の一側面を明らかにすることにより、「遺伝」の影響を過度に描いてきた教育学説史を問い直すことにつながると考える。

本稿では主に『教育学術界』を資料とする。その理由としては、同時期の『教育時論』や『帝国教育』といった教育雑誌と比べて、①1899年から1939年という戦前の広い範囲をカバーできること、②主に教育の理論に重点を置いた雑誌であること、③八大教育主張講演会<sup>8</sup>を開催するなど日本教育史上で大きな役割を果たしていたことが挙げられる。以上の理由から、戦前日本の「本能」概念を明らかにするうえで適切であると考えられる。

## 1. 『教育学術界』にみる「本能」概念

本章では、『教育学術界』のタイトル記事における「能力」諸概念を数え上げることによって、当時の教育論者がいかなる概念に注目していたかをみていく。

表1は『教育学術界』記事における、先天的「能力」に関わる「遺伝」「本能」「天性」「素質」をタイトルに持つ記事数を表している<sup>9</sup>。表1から分かるように、非生物学概念である「素質」と「天性」が、40年間でテーマとなることはほとんど皆無であったことと比べると、生物学概念である「遺伝」と「本能」が数多く語られているのが分かる。

表2は『教育学術界』で「本能」をタイトルに含む記事の巻号数、筆者、発行年をまとめたものである。ここで注目すべきは、全18点の記事の中で応問欄、つまり一般の読者からの質問投稿が3件あることと、第55巻において「本能と道德生活」と題する臨時増刊号が組まれていることである<sup>10</sup>。このことは、前者は「本能」概念が専門家だけでなく一般の人々の関心も一定程度引き付けていたことを意味し、後者は「本能」概念が教育学にとって重要な概念と認識されていたことを意味しているといえるだろう。

表1 『教育学術界』記事における各概念をタイトルに持つ記事数

遺伝	20
本能	17
天性	3
素質	1

表2 教育学術界「本能」記事一覧

番号	巻号数	タイトル	筆者	発行年
①	4巻5号	本能と衝動とは相関係する所あるか	応問欄	1902年 3月
②	15巻4号	本能に関する研究	高島平三郎	1905年 7月
③	15巻4号	衝動と本能との区別如何	応問欄	1907年 7月
④	15巻5号	本能に関する研究	高島平三郎	1907年 8月
⑤	15巻6号	本能に関する研究	高島平三郎	1907年 9月
⑥	18巻6号	本能について	福来博士	1909年 3月
⑦	19巻1号	本能について	福来博士	1909年 4月
⑧	23巻2号	教育本能と人の発展	物江齊	1911年 5月
⑨	27巻5号	ベルグソンの叡智と本能	島村嘉一	1913年 8月
⑩	28巻2号	本能と習慣及其訓練	岡島誘	1913年 11月
⑪	28巻3号	本能と習慣及其訓練	岡島誘	1913年 12月
⑫	28巻5号	心的進化とダーウィンの本能説	大槻快尊	1914年 2月
⑬	33巻1号	本能に就いて	応問欄	1916年 4月
⑭	38巻3号	本能と教育	加畑徳治郎	1918年 12月
⑮	40巻5号	模倣本能と教育	城生葉二	1920年 2月
⑯	55巻臨時増刊	本能と道德生活(特集号)	不明※	1927年 9月
⑰	72巻6号	新心理学と本能・社会性	波多野完治	1936年 3月
⑱	76巻2号	民族の本能	藤平武雄	1937年 11月

※ ウィリアム・マクデュガル著、佃井久満治訳だと推測される。

出典 教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（第1期・教育一般編、第11巻（教育学術界）、日本図書センター、1986年）、教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（第1期・教育一般編、第12巻（教育学術界/教育）、日本図書センター、1986年）より筆者作成。

## 2. 「本能」概念と教育

本章では「本能」概念を『教育学術界』の各論者がいかに認識していたかを具体的にみていこう。表2であげた「本能」を扱う記事は、大きく分けて二つのことを論じていると理解することができる。一つ目は、「本能」概念とはいかなるものかを論じたものである。二つ目は、「本能」概念と教育との関係について論じたものである。なお、以下、本文中の丸数字は表2の番号と対応している。

### (1) 「本能」概念とは何か

「本能」概念は論者によって言及が異なるが、以下では三つ以上の記事に共通してあげられていた「本能」概念の特徴を抽出した。その結果、四つの特徴が指摘できる。第一の特徴として、「本能」とは、後天的な経験や練習を積むことなく、ある目的のために、特定の行動や感情を引き起こす傾向ということだ。表2で該当する記事は①・⑩・⑫・⑭・⑰である。1902年の応問(①)において返答者は、「本能に就きては、之れを定義して一定の目的の自覚なく、又この目的を達する様に行動すべき予習の経験もなくして、一定目的を達すべく反射的に発作する所の生得的運動なり」<sup>11</sup>と述べている。つまり、「本能」は後天的な経験に依存していないと説明されている。

第二の特徴として、「本能」とは個体・個人ではなく、種全体に共通する先天的傾向であるというものだ。このことを述べている記事は、②・③・⑬・⑯である。中でも1907年の応問(③)に対する返答に端的に表れている。返答者は「衝動」を、ある対象に対して何らかの欲求を抱き、目的を持った運動を引き起こす傾向と言及したのに対して、「本能」を以下のように説明する。

衝動が本となりて発達し来りしものにて、即ち衝動的活動中の或る特別なる物を指して云ふ。…(中略)…本能は主として種族の利害に関係する者なり。即ち本能は衝動的活動たるには相違なけれど、特に種族の維持発達又は繁殖に関係ある者を云ふ。されば本能は我々の有する衝動的活動中極めて必要なる者なるが、幾多の世代に世代を重ねたる後次第に人類種族の間に伝来し来りし物なり。<sup>12</sup>

このように「本能」を種の生存のために必要なものと捉えるようになった背景について、高島平三郎はダーウィンの進化論の影響があったと述べている。高島(②)は、進化論以前では「本能」は主に動物のもののみなされ、「神の付与したもの」や「自然の力」と理解されていたのに対して、進化論以降では人間にも「本能」があり、自然淘汰の作用によって先祖から伝えられたものと考えられるようになったという<sup>13</sup>。このように「本能」が定義されたことによって、これまで注目されてこなかった人間の行動や情緒が、人間の基礎をなすものとして注目を集めるようになったと推測できる<sup>14</sup>。例えば、子どもが何かを破壊するといった行為はかつては禁止され、罰を与えるべきものと認識されていたであろう。しかし、このことを「本能」の観点からみれば、物の破壊は「好奇心」という「本能」の現れであって、物の真の在り方を理解するために、人間という種に受け継がれてきた行動であるから尊重すべし、という正反対の評価を導き出すことも可能なのである。

第三の特徴として、「本能」は段階的に発現し、各段階で適切な環境が与えられることによって、個体の傾向として定着するというものだ。逆にいえば、適切な環境が適切なタイミングで用意されていなければ、ある特定の「本能」は消滅してしまうことになる。このことを述べている記事は、⑤・⑥・⑩・⑫である。岡島誘(⑩)の記事はステファン・シェルダン・コルヴィンの“*The Learning Process*”という本の一部を紹介したものであるが、その中で「本能」の発現について「本能は段々に発現するとの原理と関連して、教育上非常に重要な他の一事実がある、即ち本能が発現する時に、若し其の発現の為に適当なる環境が与へられないと、本能は何時も有機体の生活に於て習慣として確立されずに消えて仕舞ふのである。」<sup>15</sup>と述べた。つまり、人間は環境を調節する

ことによって「本能」の発現を一定程度操ることが可能になるのである。もちろん岡島は「根本的本能」のようなものは生命と密接に関わりを持っているがゆえに、除去することは出来ないと述べているが、一方で、「本能は訓練し、変更することが出来ないと云ふ訳ではない」<sup>16</sup>と述べ、「本能」を後天的に操作できる可能性を暗に示しているのである。

第四の特徴として、「本能」が「意識」の作用を伴うということである。このことを述べている記事は、②・⑩・⑯・⑰である。臨時増刊号(⑩)においては「本能」は無意識において行われる「反射」と区別され、「本能とはその所有者をして一定の対象を知覚せしめ、それに注意を集注せしめ、更に此知覚によつて特殊の情緒を興奮せしめ、又此知覚の対象に対して特殊の行動又は少くとも行動の衝動を惹起せしむる遺伝的或は生得的精神物理的傾向である。」<sup>17</sup>と定義された。この定義が意味するのは、「本能」とは、認知的・感情的・能動的、という三つの要素を含んでいなければならない、ということである。しかし、ここで言及されている「意識」とは、思考し判断する「理性」のような働きではないであろう。生理学的にみれば「反射」の過程が、感覚刺激に対して脳を通過せずに行動を引き起こすのに対して、「本能」行動の過程は、感覚刺激がいったん脳を経由して行動に移されるがゆえに、認知・情緒・能動といった作用が引き起こされる。例えば、私たちがナイフを持った人と出会ったと想定してみよう。そのとき、私たちはナイフを持った人を認識・知覚し、「怖い」という感情を経験し、「逃げる」という先天的・遺伝的に規定された「本能」行動に出るのである。ここには個人の「主体的・理性的」な判断は反映されていない。ゆえに臨時増刊号(⑩)では、このような「本能」概念からいかに「道徳」的な行動を導くかということを論じているのである。

以上みてきたように、「本能」概念は、1) 生後の経験に依存せず発現し、2) 種の生存のために必要で、3) 発現後、教育によって変更可能な、4) 「意識」を伴う先天的傾向と理解されてきたといえる。

## (2) 「本能」概念と教育との関係

以上のような「本能」概念理解が、教育学にどのような影響を及ぼしたのか、どのような教育言説を語ることを可能にしたのかを考察していく。教育との関係について論じている記事は⑤・⑦・⑪・⑫であるが、どの記事も同じ内容を述べている。そこで、以下では高島平三郎(⑤)を例に検討をしてみよう。高島は、「本能」を踏まえた教育について以下のように述べている。

道徳の教育も宗教の教育も、智識上の教育も、有らゆるものが皆本能として発現する時期をよく認めて、其の時期に応じて教育を施して行くと云ふことは、教育者に取りては大切なる任務である。いづれ云ふことを教育しても宜いやうに考へて、勝手なときに勝手な事を教へると云ふことは、全く無益であつて、非常に不経済なる労力の費し方と言はなければならぬ。<sup>18</sup>

ここでは、あらゆる教育が「本能」の発現に留意して行われなければならないとされている。「本能」が種にとって必要な働きであるならば、それを教育が適切に発現させてやるのが求められるのだ。そのため⑤において高島は、「健康人」と「精神病者」の違いを、「本能が適当に調和的に発現して」<sup>19</sup>いるか否かにみている。このような「本能」概念に基づく教育言説は、戦前日本において力を持っていた優生学的言説とは一線を画していた。当時支配的だった優生学的言説は、個人の能力差が「遺伝」的に決まっており、教育は「遺伝」の影響力に対して微々たる影響力しか持たないと主張する<sup>20</sup>。ゆえに、教育は消極的な働き、つまり「遺伝」を補助する役割しか持ちえないことになる。しかし、「本能」概念は、全ての人間に環境と適切な相互行為を行うための先天的・「遺伝」的傾向が存在していることを前提としている。そのような理解における「遺伝」とは、なにかそれ自体で実体を持つような概念ではなく、先祖の傾向が次世代にも受け継がれているということ

を説明するための概念でしかない。したがって、教育は消極的役割などではなく、「本能」が適切に発現するように導く、あるいは、消滅させるという積極的役割を持つことになるのである。

このように「本能」概念は、教育学において「遺伝-環境」図式とは異なる語りを可能にしていたといえる。先天性を表す「本能」に対応して、後天性を表すのに使われていた概念が「習慣」であった。加畑徳治郎(⑩)は「教育は本能より出発して之れを修飾し之れを改善して善良なる習慣の構成を致すべきものであるといふても大体に於て誤りなからうと思ふ。」<sup>21</sup>と述べている。子ども達の知覚や感情や行動を「本能」の観点から捉え、それらを適切に導くことで「習慣」として定着させることが、教育の担う役割とされたのである。「本能」と「習慣」との違いとしては、岡島(⑩)が「習慣は有機体の経験に基くのに、本能は斯やうな経験なしに起る点に存ずる。習慣は学習の結果であるが、本能と反射作用とは学習の原因たる要素である。」<sup>22</sup>と説明しているように、「習慣」概念は後天的な経験を通じて形成される「第二の本能」とでも呼べる心的構造を意味していた。

### 3. 教育辞典・教育学術書における「本能」の位置づけ

表2から分かるように、「本能」をタイトルに含む記事は、1920年以降になると急激に減少していく。このことは「本能」概念が教育学から消えていったことを示しているのだろうか。たしかにそのような捉え方もできるが、一方で、「本能」概念が教育学においてしかるべき地位を得たがために、中心的なトピックとして

表3 教育辞典における「本能」の記述 ○=記述あり、×=記述なし

辞典名	編者	刊行年	「本能」概念の特徴					
			生後の経験に依存しない	種に共通の傾向	後天的に変更可能	意識を伴う	教育は本能の発現に留意	習慣として定着させる
教育辞典[第12版]	篠原助市	1922年	○	×	○	○	○	○
最新教育辞典	渡辺政盛	1930年	×	×	○	×	○	○
現代教育辞典	日本教育学術協会	1931年	○	「種族本能」の項にあり	○	○	「好奇本能」の項にあり	×
入澤教育辞典	入澤宗寿	1932年	○	○	○	×	○	×
増訂教育辞典	篠原助市	1935年	○	○	○	○	○	○
教育学辞典	城戸幡太郎	1939年	○	○	○	○	×	○

出典 筆者作成

論じる必要がなくなったとも考えられる。第2章第1節でみた『教育学術界』における「本能」概念の特徴を、「生後の経験に依存しない」、「種に共通の傾向」、「後天的に変更可能」、「意識を伴う」とし、第2節でみた「本能」と教育との関係を、「教育は本能の発現に留意すべき」、「習慣として定着させる」とすると、1920年以降の教育辞典における、「本能」概念の特徴に関する記述の有無は表3のようになる。ここから分かるように、1920年から一貫して「本能」の記述が教育辞典にあり続けたことが分かると共に、『教育学術界』の議論との高い対応関係を読み取ることができる。以下では、「本能」概念の特徴がすべて記述されていた、篠原助市の『増訂教育辞典』を実際にみてみよう。少し長いが引用する。

一 広義には生まれながらにして有する凡ての性能を指す。本能的なる形容詞は度々此の意義に使用せらる。

二 目的を予知することなく、之に対する予備的教育又は練習なくして、能く目的に適合する行動を営み、しかも、同種族に属する凡ての個体に共通に存する能力。…(中略)…。次に本能による動作即ち本能的動作と反射運動との区別については(一) 反射運動は全く無意識なれども、本能的動作は意識的にして、必ず刺激に対する知覚と之に伴なふ感情とありて、然る後運動に移行し、(二) 反射運動は動作甚だ簡単なれども、本能的動作は概して複雑にして、其の全活動中に簡単な運動の一系列を含み(鳥の巣を営む場合につきて見よ)(三) 本能的動作は常に快感を伴なへども反射運動は必ずしも然らず。最後に本能的動作は第二次自動運動と頗る相似たれども両者は全く起原を異にし、前者の先天的なるに反し、後者は後天的たり。

〔本能の発現〕本能の発現には一定の時期あり、之を本能の周期性といふ。人類に於て最も早く現るゝは自己保存の本能にして、最も遅きは種族保存の本能なり。又本能は其の発動期に当りて適当なる刺激を欠くときは遂に発現せずして止むことあり、之を本能の一時的性といふ。

…（中略）…。

〔本能の変化と教育〕本能は遺傳的傾向なれども必ずしも固定せるものにあらず、境遇に応じて、多少之を変化することを得。…（中略）…。人に於て本能と称せらるゝもの多くは先天的要素に後天的経験の結果を加へたるものにして、本能と習慣との結合より成り、其の如何ばかり遺傳的にして、如何ばかり生後の経験によるかは容易に之を決定する事能はず。…（中略）…。本能の発現には前に述べたる如く一定の時期あるを以て、其の発現期に際し、適当なる指導を加へざる可らず。「鉄は熱せられたる時に当り之を鍛へざるべからず。」若し適当なる指導を加へるときは不良なる本能をも徐々に醇化すること必ずしも不可能にあらず<sup>23</sup>。（傍線、引用者）

以上の引用から分かるように、『教育学术界』において述べられていた「本能」についての言及が辞典の記述に反映していることが分かる。このことは、『教育学术界』における議論が、一定程度教育学に影響を与えた可能性を示唆している。

では、教育学用語として受容された「本能」概念は、教育学者の思想の中でいかなる地位を与えられていたのだろうか。以下では、1920年以降に出版され、広く教育学一般を論じた著書の中で<sup>24</sup>、「本能」への言及が多かった谷本富<sup>25</sup>と入澤宗寿<sup>26</sup>の著作を分析する。谷本が1923年に出版した『最新教育学大全』では、「本能」は「教育の基礎並に条件」と題する章の中に位置づけられている。谷本は、教育が可能である理由は被教育者の可塑性にあり、この可塑性を人々は「人性」の問題として考えてきたという。その上で、「今日吾輩が教育学上に於て科学的に人性を論議せんとするに方つては必ず先づ本能の事より出発せざらばならず。蓋し若し本能を以て人間並に諸動物に於ける先天的傾向なりとせば、人間の本能はやがて所謂人性なりとも看られざるにあらず。」<sup>27</sup>と述べ、「本能」を「人性」を考える上でのキー概念として位置づけた。また、谷本は、「本能」と「遺伝」について「教育の基礎たるものは本能或は傾向にして、而して其の主要の条件は即ち遺伝にあること、誰人も亦之れを承認するに躊躇せざるならん。」<sup>28</sup>と説明した。ここで谷本が、「本能」を「教育の基礎」と位置付けていること、また、「本能」と「遺伝」を区別して認識していることは非常に重要である。どちらの概念も先天的なものを表す概念であるが、谷本の中では質の異なるものとして認識されていたのであり、「本能」概念は彼の理論において「遺伝」と代替不可能な概念として理解され使用されていたのである。

入澤の1921年の著書『最近教育学』でも、「本能」は教育の基礎として位置づけられていたが、同時に道徳との関わりでも論じられていた。「品性の意義要素及び活動」と題する章において入澤は以下のように言及している。

品性陶冶の上からいへば初期に現はれる恐怖、憤怒の本能、遊戯、模倣、競争、所有の本能は注意を要するもの、同情、羞恥の如き又大に顧慮すべきである。要するに本能は品性の基礎であり、人格的活動の根本を形造るもの、而して決定的のものでなく変化し発達し得るものであるから、これを道徳的、社会的に導くことが訓練の仕事である。<sup>29</sup>

入澤は「本能」を、人間の土台を形作り、人間形成に携わる者が注意して導くべきものと理解していたことがうかがえる。このように、「本能」を「遺伝」とは代替不可能な概念として、教育の基礎、または、人間形成の出発点に位置付ける教育学者が存在していた。このことから、「本能」が1920年以降、本流ではないにせよ、教育を語る際の一概念として定着したと推測できる。

## おわりに

以上、本稿では教育学において「本能」概念がいかに理解されていたか、またいかなる教育言説を生み出したかということ、『教育学術界』を資料として明らかにしてきた。当時、教育学が注目していた「本能」概念は、後天的な経験に依存せずに、段階的に現れる、種の生存のために必要な、「意識」を伴う先天的傾向を意味すると理解されていた。教育は、この「本能」の発現に注意し、それを適切に導く必要があるとされた。このような教育言説は、当時流行していた優生学的言説や遺伝決定論に基づく言説とは一線を画していた。なぜなら、「本能」とは、すべての人に先祖から共通して受け継がれている、外界に適切に反応するための傾向と理解されていたからであり、「本能」が「正しく」導かれさえすれば、すべての人が「正しく」成長することが可能だとされていたからである。このことは「本能」概念が「遺伝—環境」図式に必ずしも還元されない教育言説の存在を可能にしていたことを意味する。「本能」は後天性を表す「習慣」概念と組み合わせることで、先天的に現れてくる傾向を、後天的な働きかけによって身につけていくという語りの存在を可能にしたのである。

『教育学術界』誌上では1920年以降、「本能」をタイトルに含む記事が減少していくが、そのことに対して「本能」概念が教育学に定着したという仮説を提示した。「本能」についての『教育学術界』での議論と、教育辞典の説明は高い対応関係を示していた。また、谷本富や入澤宗寿の教育理論において、「本能」は教育の基礎として、また訓育や人格形成の基礎として「遺伝」とは異なる重要な位置を占めていたのである。以上のことは、戦前日本の教育学において「遺伝」の影響を強調してきた教育学説史を問い直す一助となるだろう。

本稿においては「本能」と「遺伝」の関係、教育と「遺伝」の関係については明らかにすることができていない。また、「本能」概念が戦後にいかに引き継がれていったのかも手付かずのままである。今後の課題としたい。

### 〔注〕

- 1 1899年に同文館から創刊され、1939年まで継続した教育雑誌である。中島半次郎と藤井健治郎が中心となり発足させた教育学会（1900年に教育学術研究会に改名）が『教育学術界』を創刊した。発行部数は創刊当時で約2000部、後に4000部を突破したという。主な読者としては、教育学研究者や師範学校の学生、文検受験者、小学校教師であった。雑誌の特色としては、西洋の教育理論の紹介とその応用に重点が置かれており、様々な論争の起こる媒体となっていた（小熊伸一「雑誌『教育学術界』解説」寺崎昌男編『教育学術界 解説』大空社、1991年、1-21頁）。
- 2 R. ボークス（宇津木保、宇津木成介訳）『動物心理学史—ダーウィンから行動主義まで』（誠心書房、1990年）は進化論から始まる動物心理学の展開を「本能」概念に着目して描いている。
- 3 ダーウィンのいとこであるフランシス・ゴルトンによって提唱された学問であり、人類の生得的資質の改良を目標としていた。（米本昌平他編『優生学と人間社会』講談社学術文庫、2000年、14-25頁）。
- 4 高木雅史「『大正デモクラシー』期における『優生論』の展開と教育—教育雑誌の内容分析の視角から—」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』第36巻、1989年、174頁。
- 5 桑原真木子「優生学と教育 『教育的』環境操作がたどりつくところ」『現代思想』第31巻第13号、2003年11月、215-229頁。
- 6 森田尚人「近代日本教育学史の構想—思想史方法論をめぐる個人的総括—」『近代教育フォーラム』第22巻、2013年、74頁。
- 7 同上。

- 8 1921年に大日本学術協会が主催した講演会で、大正新教育を象徴する歴史的出来事とされている（橋本美保「八大教育主張講演会の教育史的意義」『東京学芸大学紀要・総合教育科学系』第66巻第1号、2015年、55-66頁）。
- 9 なお記事の数え上げには国立国会図書館デジタルコレクションを利用した。複数号にまたがる連載記事はそれぞれ独立に一つの記事とし、応問欄や図書紹介も一つの記事と数えた。
- 10 「本能と道德生活」と題する臨時増刊号は、国立国会図書館デジタルコレクションではヒットせず、教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』第1期・教育一般編 第12巻、日本図書センター、1986年、188-190頁でその存在を確認した。
- 11 「本能と衝動とは相関係する所あるか」『教育学術界』第4巻第5号、1902年3月、127頁。
- 12 「衝動と本能との区別如何」『教育学術界』第15巻第4号、1907年7月、110頁。
- 13 高島平三郎「本能に関する研究」『教育学術界』第15巻第4号、1907年7月、38-39頁。
- 14 日本学術協会編『現代教育辞典』啓文社、1931年では「本能」の項に加えて、「好奇本能」「模倣本能」「遊戯本能」が独立した項として設けられている。
- 15 岡島誘「本能と習慣及び其訓練」『教育学術界』第28巻第2号、1913年11月、34頁。
- 16 岡島誘「本能と習慣及び其訓練」『教育学術界』第28巻第3号、1913年12月、44頁。
- 17 「本能と道德生活」『教育学術界』第55巻臨時増刊号、1927年9月、10頁。
- 18 高島平三郎「本能に関する研究（続）」『教育学術界』第15巻第6号、1907年9月、18頁。
- 19 同上、19頁。
- 20 前掲高木、171頁。
- 21 加畑徳治郎「本能と教育」『教育学術界』第38巻第3号、1918年12月、46頁。
- 22 岡島誘「本能と習慣及び其訓練」『教育学術界』第28巻第2号、1913年11月、36頁。
- 23 篠原助市『増訂教育辞典』宝文館、1935年、875-876頁。
- 24 今回検討した著作は、阿部重孝『小さい教育学』（広文堂、1927年）、入澤宗寿『最近教育学』（日進堂、1921年）、小西重直『教育の本質観』（玉川学園出版部、1930年）、篠原助市『教育の本質と教育学』（教育研究会、1930年）、谷本富『最新教育学大全』（同文館、1923年）吉田熊次『教育学原論』（教育研究会、1927年）である。
- 25 東京帝国大学文科大学特約生教育学科時代に、エミール・ハウスクネヒトよりヘルバルト教育学を学び、日本のヘルバルト教育学の受容に貢献した。後に、ヘルバルト教育学の個人主義的性格を自ら批判し、国家主義的教育学へと転向し、新教育運動を起こした。（唐澤富太郎編『図説 教育人物事典—日本教育史のなかの教育者群像—』上巻、ぎょうせい、1984年、709-714頁）。
- 26 東京帝国大学文科大学哲学科において教育学を専攻し、後に同大学文学部助教授となる。入澤は、自身の教育思想研究を基に、日本の新教育の実際の指導にもあたった。中でも、川崎市の田島実験学校の実践には入澤の「体験」を重視する教育理論が強く反映されている。（教育人名辞典刊行会編『教育人名辞典』理想社、1962年、52頁。）
- 27 谷本富『谷本富著作集 第5巻 最新教育学大全 上巻』学術出版会、2011年、128頁。
- 28 同上、153頁。
- 29 入澤宗寿『最近教育学』日進堂、1921年、243頁。